

山と心の病院

6月18日付ブログのタイトルは、「寝耳に水、青天の霹靂」とした。この日、NPO法人「山のECO」代表理事、上幸雄さんに声掛けられて環境省に同行、田島一成環境副大臣に、「『山岳自然環境でのトイレ対策推進』に関する要望書」を手渡した。

「環境省は9日、『事業仕分け』の各省庁版である『行政事業レビュー』を行い、山小屋のトイレ整備を後押しする『山岳環境等浄化・安全対策緊急事業費補助』が、トイレ利用者が負担すべきだなどの理由で『廃止』と判定された」、10日付け信濃毎日新聞朝刊の記事である。

上さんに教えられるまで、全然知らなかったこと。まさに寝耳に水、青天の霹靂とはこのことだ。廃止と判定した有識者8人の、山(自然)に対する認識の低さに愕然とした。先に仕分けありき、という印象を拭えない。

山は、一部道楽者の占有物ではない。山はかけがえのない日本の宝であり、文化である。ぼくは田島副大臣に、「一億二千万人総登山者化計画」について語らせて頂いた。会員諸賢には折に触れて話しているぼくの「夢」、いや「確信」について、である。いまの日本、元気がない。戦後65年、平和が行き過ぎて一億二千万人総白痴化、自分勝手に垂れ流がされる情報を取捨選択できないまま、頭の中が一杯、誰も彼もが「明日」を考慮することができなくなってしまった。なによりもまず、頭を空にしなくっちゃ。頭が空になればスッキリ、爽やか。頭を空にする最良の方法が、山に登ること。日本中の皆さんが、山に登って頭を空にすれば、日本中がスッキリ、爽やか、日本の元気が取り戻せることは間違いない。山は一部道楽者の占有物なんかではなく、一億二千万人の心の病院なのである。

山小屋は、病院の待合室のようなものではないか。その待合室に必要なトイレの設置を、受益者負担であるべきだとして、補助の廃止を判定する外部識者につながりした。未病の人が増え、病院の待合室がサロン化している。未病をストップ、健康保険料の無駄遣いに歯止めをかけるためにも、山登りの輪を広げていく必要がある。

山ガールが流行っている。彼女たちが山で自分を発見、アイデンティティーを確立すれば、自信を持って結婚できるはず。自身のアイデンティティーが確立できていれば、安心して出産、愛情を持って育児が出来ようというものだ。補助が廃止されて、山のトイレが汚くなったら、山ガールの絶滅は必定だ。山ガールが絶滅したら、日本の未来はない。山のトイレがきれいになったら、山ガールはもっと増える。風が吹くと、桶屋が儲かるというが、山のトイレがきれいになると、日本の元気は取り戻せるのである。政治家には目先の損得に捕らわれず、10年20年先を見据えたリーダーシップを要求したい。

山は心の病院。山小屋は待合室。待合室にはきれいなトイレが必要だ。